



—初めて川越に来たのはいつですか。

バス旅行で、10年前くらいになります。

—団体だと、あまり街を見る時間がなかった？

そうですね。菓子屋横丁とかにバスが止まって、ぐるぐる巡って。

—絵を描くために来たのは？

この前が初めてです。一泊して、夜までずっと絵を描いていました。暑かったんで、喫茶店に入って思い出しながらドローイングを進めて、それをもとに家で色を膨らませて描いていました。

—10年前と比べて、どんな印象でしたか？

10年前はいきなり世界が変わって、タイムスリップしたような感じになって。商店で買い物をして楽しかった記憶があるんですよ。それを思い出して。もう一回来たいと思っていました。でも今回来てみると、印象が変わりましたね。新しい店が増えて、和モダンというか、おしゃれな店が増えたな、と思いましたね。

—観光地化が進んだ(笑)

そういうことですね(笑)。でもあの頃と変わらない街並みを結構描きました。感動するところは変わらなかったですね。前はそんなにドローイングを描いてなくて。今の方が、絵を直感で楽しめる。10年で変わったんですね。

—それは画家として、自分が変わった？

自分が変わったんですね。対象とのあり方が。そんなに量産しなかったですね、前は。

—なぜ変わったんでしょう？

ロシアに何度も行くようになって、そのたびに、たくさんのスケッチをするようになったんです。

画材とのやりとりの中で、色とイメージが膨らんでいくんです。

—現地でスケッチをして、それをもとに家に帰ってから絵に組み立て直すんですか？

描いているときに、画材とか紙とかのやりとりの中で、色とイメージが膨らんで、絵が見えてくるんですね。

—画材は何を使いますか？

日本画絵具や顔彩をならべて、アクリルも使うことがあるんですけど、色と和紙とコラージュと筆と水彩色鉛筆のやりとりの中で、ああ楽しいな、っていう気持ちが作用して、どんどん膨らんでいくというか。

—最初から決めているわけではない。

じゃないんですね。頭の中でできてないんですね。手でなぞるように簡単な線を現地で描いて、その線をもとに感動が膨らんで、あー、こんな感じだったなーって、和紙とやりとりしながらまた膨らみます。その場で描いたものは本当に稚拙な感じで、メモなんですね。

—メモは見たことがないですね。

見せないようにしてるんです(笑)。恥ずかしいから。現場では色をばらばらっと水彩鉛筆で描いて、家に帰って、アクリル絵具を乗せて水をはじかせながら垂らしこみをしたり、線をしっかり一人きりで描くのが楽しい瞬間なんですね。

—線が強いんですよね。

線が好きなんです。ぐっとした……。

—日本画の画材で川越を描いても、どこかヨーロッパ的に見えますね。

洋風建築に感動しているのもあるんですけど、油絵もちょうと乗せています。油絵を勉強してきたので、立体をとりながら線は日本画という感じで、和洋が組み合わさっているのもいいなと。



—それが川越の街と似ている。

言われてみればそうですね。洋画も日本画も混合してしまえるように、最近は意識しているんです。特に油を使うようになってから、油絵具のペトロールと水をはじかせたり、彫刻刀で掘り起こしたり、コラージュもそうなんですけど、皺をフロタージュしたり、すべての技法を自分の心情に近付けるために、混ぜ合わせてしまおうと。

—心情を表現する方法論はあるんですか？

今回は透明感のあるドローイングをしたいと思ったんです。街でドローイングしたときは、こういうタッチになりますね。大きいタブローのときはオイルパステルだったり、線を筆で描いたり。重いテーマはもっと色を使おうとか、テーマによって選んでいます。壊して、流して、そのあと色に挑戦するというような、段階を踏んでいく感じがあるんです。小品のときはすごく透明な気持ちで、楽しいです。大きいときは挑むって感じ。挑戦しても楽しい発見はあるんですけど、全体を見なきゃいけないんで、絵と対峙している感じになっちゃう。小品は実験しているって感じですね。こうしよう、ああしよう毎回発見しながら作れている。

—小さい作品はタブローより実験性が高い。

高いですね。素材もひとつひとつ違うので。例えば時の鐘の絵は、ふわっと立ちのぼるような感じで、いろんな音をはじかせながら建っている。下地にアクリルを仕込ませて、水彩を乗せて、そのあと筆で線を描いて、あとは水を含んだもので流して……垂らしこみを何回もやるんですね。最初だけじゃなくて、かなりできあがった段階で壊す

ように垂らしこみして、それを拭き取ったり、お風呂場で洗って流しちゃうんですね。それで出てきたものを、もう一度線で起こす。何回も壊しながら創作していく。乗せて乗せてばっかりだと自意識が強くなっちゃうんで、それを洗い流して。素材の下地が見える方が、空間に溶けてくれるし、霧がかかったようになる。そうすると新しい世界が見えてくるんです。

一流しても元の絵には戻らないんですよね。透明感が増すんですか？

増します。下にアクリルとかが入っているんで、流しきれない色が出て、空間の要素になるんです。流して、垂らしこんで、何層もあるんですけど、そこから見えてきたものをまた線で描いて。削り落とすと、ちぎりと落とすと、彫刻描法的な……。

—コラージュもしていますね？

はい。薄い和紙や布巾の皺を、自分の皮膚に見えるように貼って、何回も日本画の画材を塗り

重ねて。だから接着剤は膠だったり、アクリルの接着だったり、コラージュの糊だったりするんです。いろんなやり方を併用しているんで。

—素材を工夫するようになったのは、いつですか？

ここ数年です。会社を辞めて、いろんな挑戦ができるようになったんで、それでガツと(笑)。

毎日どんどん絵を描きたい。
苦しいと思うことはないですね。

—今回、本当は日程的に無理な展覧会をお願いしてしまったんだけど、最初に電話したときから「準備できてます」という勢いだったでしょ。凄いなと思いました。人は締め切りがないと、なかなか創作できない。描くことが生きる時間とイコールになっているということですね。観て感じたものをどんどん描いて、絵がたまってくるわけですよ。

そうなんです。発表する場もないのにどんどん溜まっていく。遠い所へ行くときは、いっぱい描いて楽しいんですけどね。

—楽しいんですね。辛くなったりはしない？

まったくないですね。絵を描いて苦しいと思うことはないですね。

—壁に突き当たったり、表現のことで悩んだり……

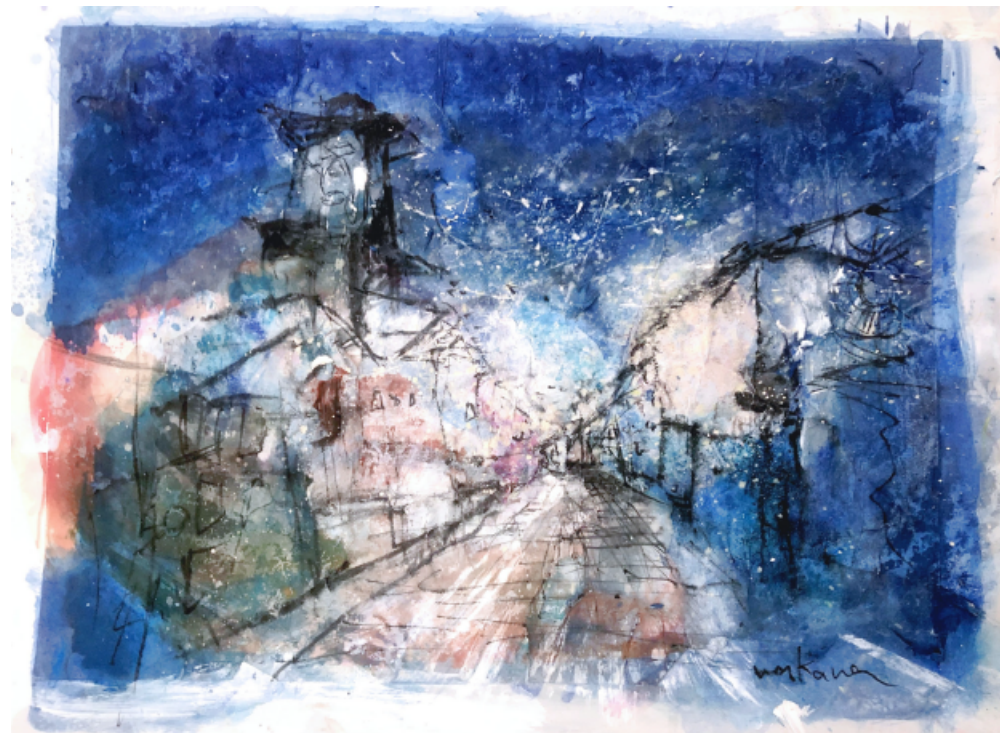
それもないですね。大きい絵は全体を観なきゃとか、自分に課題を与えることはあるんですけど。

—描けなくなるときはない？

ないですね。毎日毎日楽しくて。どんどん描きたいという「派」なので。

—「派」なんですね。

「派」(笑)。水彩色鉛筆を毎日絶対1本はなくしちゃうんで、最高に画材代がかかるんです。1本じゃないです。2本とか、日曜日はもっともっと描いちゃう。私、水彩色鉛筆が本当に好きなんです。それで自分の生活を描くのが好きなんです。でも会社に行っているときは、会社をやりながら、ちょこちょこ、こっそりやっていて。そういう生活から、全開にできる、大好きな絵と結婚できたという



川越市幸町 夜の時の鐘風景 2020年 240×320mm

感じがして。もうちょっと早くやりたかったな。こっそり描くんじゃなくて、もっともっと自分の好きなことをやって……。

—会社でこっそり描いていた？

機械をまわしながら、仕事するふりして。絵のことばかり考えていたんで、どうしようもない社員だったんです。

—何を描いていたんですか？

いま描いているもの……オマージュだったらオマージュを描いて。でも何も見なくても仕事ができちゃうという状況になってからですね。7年、8年は全然そんなことできませんでした。

—仕事を覚えなきゃいけないですからね。

何やってもできるようになってからです。そのうち大作の下地を会社の人がみんな貼ってくれて。展示作業も手伝ってくれて、もう家族みたい

に。今も、大丈夫かって応援してくれます。

—それは凄いですね。

今は毎朝早く起きて、アトリエに行って小品を描いてから大きな作品に向き合ってます。アトリエに行ったら一日がはじまるというのが体に染みついている、このリズムがいいんだってわかったんで。

—自宅にアトリエがあるんですか？

そうです。パソコン室も作ったんで、印刷したり、自分の作業をまとめる場にしています。印刷の仕事も継ごうとも思ったんですけど、向いてないと思ってやめました。自分は絵がやっぱり……。パソコンとか印刷機は、自分の絵をもう一回客観的に見る場としてしか使わない。仕事としてはちょっと無理だなと思いました。前の会社から退職金代わりに良い機械をもらえたんです。15年やってきたんで、その印刷機と私は相性が良くて、相棒の



川越市幸町 ヤマワクラブ 屋根のある風景
2020年 330×237mm



川越の街に立つ少女 2020年 1066×455mm

ように使いこなしているんです。印刷は結構インスピレーションになるんですね。写真に撮ったものを印刷してみることもすごく大事なんです。

—印刷をして気がつくことはあるんですか？

こんな形してるのか、とか、見えなかったものが見えてきて。仕事で染みついているんで。この色はこうなる、ああなるって。足を使って見たものが印刷物になって、教えてくれるものがあるんです。

一面白いですね。肉眼で見ると印刷物はたしかに違うし。大抵、印刷はオリジナルな色が出ないとかネガティブに言われがちだけど。

客観的に見えるんです。本物見てもわからないんですね。それが新たな創作につながって。野見山暁治の絵本を見て、すごいな、印刷機でこんなにアートができるんだってわかって。ああいうのもやりたいなと思っているんですね。

松本竣介のニコライ堂がここにあった！

—好きな絵描きさんはいますか？

人体のドローイングは、丸木俊さんがすごい好きです。手足とか、参考になりますね。

—俊さんの手足は特徴がありますね。

あの指。関節。凄い。足も凄い。感動ですね。

—丸木俊さんと丸木位里さんの要素を両方感じます。絵を洗ったり、垂らしこみを繰り返すのは、位里さん。俊さんも位里さんの影響を受けているけど。

私、ふたりが「水と油」って言っていたのを聞いて、凄い、自分がまさにやっていることだなって。「ひとり水油」でやってるなって思ったりして。

—そんな気がしますよね。

シャガールは色を参考にしています。エゴン・シーレはもちろん好きです。人体が凄いですね。いろんな作家のオマージュをしながら、自分に引き寄せる混合技法をしたいと思っているんです。宮崎郁子さんの人形も素晴らしい。オマージュを重ねていけば、いつか自分のものになるのかな。韓国の李仲燮(イ・ジュンソプ)も影響を受けました。済州島の美術館がすごく良かったです。あの人の線を拡大して展示しているんですね。それがすごく良かった。

—もとは小さな銀紙に描かれているんですよね。

ああいう壁画を描きたいと思った。ああいう線を拡大したからこそすごい線になっているのかもしれないけど、実際にああいう線を引けたらな

と思って、帰ってからガンガンやってるんです。小さいタバコの紙、私も買いこんでやってみたんですけど、ああいうふうにはならないですね。あれはヤニでやっているのもあるらしいですけど。私、あそこで韓国の人たちとフリーハグして、とても思い出深い美術館です。

—現実のものを見て、それを絵画に、自分自身の風景に落とし込む作業については、どう考えますか？

最初は自分が鉛筆をもって一体になるためにメモ描きをして、虚構空間を作るんです。本当の線から偽物がはじまるような。

—シュルレアリスムの作家たちも、現実から出発しながら、どれだけ自由に変化できるかと考えていたわけですよね。

この前、神奈川県立近代美術館鎌倉別館の「日々を象(かたど)る」という展示に行って、絵描きは自分のかたちをかたどることが本望というのを見て、ああ、わたしはかたどりたくて飢えてるんだなと思って(笑)。今回、川越を通して飢えてる感じを展示したいなと。渴望しているものにマッチしたというか。前から川越の街並みが大好きだったんで、今はこんなにかたどれるな、と。何年越しの像がここにあった、という感じなんです。—その結果が、この展覧会ということですね。何年越しに温めてきた像と、今の現実の川越が、何というか、スパークしたわけですね。

そうですね。はじけちゃって(笑)。水と油もはじけちゃって。エネルギーが湧くような街なんですよね。好きな絵に近い……あ、松本竣介も大好きなんですけど。



川越市幸町 銀行のある風景 2020年 235×322mm

—竣介っぽいでもんね。

そう、竣介っぽいですよ。とくに銀行の絵は、「これ!」と思って。

—あれはニコライ堂だね。

「ニコライ堂あった!」と思って(笑)。ここにはあの懐かしい街があるって。

—「竣介のニコライ堂がここにある」って(笑)。それは良い話ですね。

「ここにあった!」って。教会もそうだし、大好きな洋画にマッチする素材がある街ですね。

—蔵というより、洋風建築が入ってきて、モダンな時代の残りが面白いんですね。

蔵も異次元で面白いんですけど……六角形の建物だったり、西洋を日本風にしてしまったものが、味わい深く面白いですよね。

—水と油だ。

水と油ですね。長いんですね。長い建物が好きなので、2段重ねの2階建ての長さも面白かった。

—2階建てが多いですね。

だいたい2階建てで、細長い建物。ちっちゃくて



川越市元町 街角朝陽
2020年 222×140mm



川越市元町 街角朝陽
2020年 222×140mm



川越市元町 スカラ座の夕陽
2020年 227×158mm



川越市連雀町 街頭の月 2020年 228×103mm



川越市幸町
小江戸つけものやと月
2020年 270×240mm



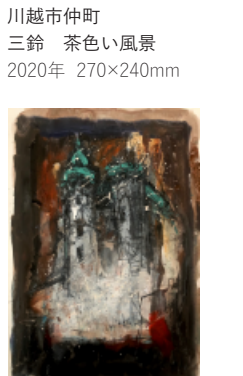
川越市幸町
小江戸つけものやと江の島
2020年 270×240mm



川越市幸町
小江戸つけものやと江の島
2020年 270×240mm



川越市仲町
蔵の建物のある風景
2020年 270×240mm



川越市仲町
三鈴 茶色い風景
2020年 270×240mm



川越市幸町
銀行のある風景-1
2020年 270×240mm



川越市幸町
銀行のある風景-2
2020年 320×235mm

長い建物は、人間の顔に見えたりして、人間を感じるんですよね。その中で暮らす人の営みが見えるというか。建物が生きているって感じですね。

—日本家屋はラインが横ですよ。でも蔵になると縦になる。

縦なんです。

—現実よりも縦に延ばして描いてるでしょ(笑)。

そういうのあるんですよ。ちょっと縦長に描いているのが多いですね。デフォルメして(笑)。

—時の鐘はまさに縦ですね。

そうなんです。昇華しているというか、空に放っている感がありますね。その感情が線に現れている。手を広げているように描いた絵もあるんです。生きる喜びの感じも面白いと思いますね。

—街灯も描いている。

街灯は素敵です。

—縦にシュッと延びている感じですね。

シュツですね。

—あれも竣介ですね。

竣介です。街がすでに絵的だなと。私、パリも行ったんですけど、パリはどうも描きたいと思わなくて、全然描けなかった。絵になりすぎているというか、完璧すぎて面白くない。あれえ、と思って。ちょっと描いたんですけど、ドローイングをタブローにしようと思わなかったんです。なぜなんだろう……いっぱいメモはしたんですけど。

地域の人に根ざした街は、
生きてる感じがするんですね。

—ロシアでは描いたんですよ。

いやもうロシアは(笑)。ロシアはもう、毎日が絵画。24時間絵画。

—すごいですね。

西洋的なんだけど、すごく味わいがあるって。ロシア版になっていて。地方なので。極東なんです。地域の人に根ざした、生きてるって感じがするんですね。

—日本と似ているかもしれませんが。西洋の影響を受けながら、地域文化に引っ張られていくところが面白いんですね。

似てますね。生きてる感じがするんですね。温室で何か育てたり、寒い地方だから夏に採った草をずっとドライフラワーにしたり。厳しい自然環境の中で楽しみながら生きている人間らしい感覚がある。ダーチャ(菜園つきの別荘)が大好きですね。田舎が好きなんですね、やっぱり。

—川越も、ほどよく土着な感じがするんですね。

ありますね。

—江戸時代は江戸文化の影響を受けて、明治になると西洋文明が入ってきて、真似してるけどちょっと違うというところが面白いですね。

緑色の建築も面白いですね。「つり具」という看板が残っている。

—関東大震災のあと、東京で流行った銅板葺きの建物ですね。いまは百丈というそば屋です。

銅板ですか。緑色がきれいですよね。今回の展示会の話をいただく前に簡単に描いていたんですけど、やっぱり細部まで描き込んで、もっと愛情込めて詳しく見つめたいと思ってたんで、こんな機会を与えていただけて嬉しかったです。

—街をテーマに展示するのは初めてですか？

そうなんです。街は初めてです。

—それは良かったです。NANAWATAでは、それぞれの作家にとって何か新しい試みをしてもらえたら良いと思っていたので、嬉しいです。

いろんな街に行って、散策して、展示してっていうのをやってみたいです。

—街は人の暮らしにつながっていますよね。

そうですね。そういうところに、じっくりと自分が佇んで創作してみたいです。何かのきっかけから、いろんなことがつながって見えてくるというか。自分一人ではできないことだけど、今回の展示会をきっかけに、またどこかの街をテーマに絵を描いてみたいと思います。

(2020年7月20日、聞き手:岡村幸宣)



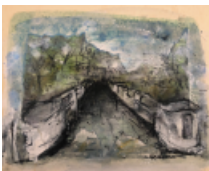
川越の街に立つ少女 2020年 332×218mm



川越市元町
ロートレックの前の猫
2020年 260×190mm



川越市元町
つり具の看板そばや
2020年 270×240mm



川越市小仙波町
どろぼう橋風景
2020年 235×322mm



川越市中原町
寝具のうおづ
2020年 125×75mm



川越市幸町
三鈴のある風景
2020年 125×75mm



川越市幸町
抜けた街通り
2020年 132×75mm



川越市連雀町
街灯のある風景
2020年 132×75mm



川越市幸町
中成堂歯科と夕陽
2020年 150×100mm



川越市幸町
赤い日に染まる時の鐘風景
2020年 93×158mm



山内 若菜 やまうち わかな

1977 神奈川県藤沢市生まれ

1998 武蔵野美術大学短期大学部美術科卒業

1999 武蔵野美術大学短期大学部専攻科美術専攻修了

2009- ロシアで「シベリア抑留」を忘れない文化交流を開始。

以後、日露友好のための個展を継続。

2011- 福島、岩手でのフィールドワークを重ね、福島の母や牧場を描いた展示を各地で開催。

2016- 岡山県、横浜市などの中学校にて芸術鑑賞授業、講演会を開催。

<主な展覧会>

2007 [個展] Zainui Gallery (ダッカ/バングラデシュ)

「3人展」A-Forest Gallery (ニューヨーク/アメリカ)

2008 [個展] 中和ギャラリー (東京) '15 '18

2009 [個展] 「日露友好個展」ギャラリーメタモルフォーゼ (コムソリス/ロシア) '11 '13 '15 '17 '19

「極東ロシアのグラフィックス「シルバーウェーブ」の祭り展」ロシア国立極東美術館 (ハバロフスク/ロシア) '10 '13

2016 [個展] 「牧場 山内若菜展」原爆の図丸木美術館 (埼玉)

2017 [個展] 「牧場 山内若菜展」ロシア国立極東美術館 (ハバロフスク/ロシア)

[個展] 鎌倉ドゥローイングギャラリー (神奈川) '18 '19

2018 [個展] 「牧場 山内若菜展 日食月食編」GOGギャラリーオフグリッド (福島)

2019 [個展] ギャラリー伊達 (福島)

「NUDA VERITAS 宮崎郁子 山内若菜」岩崎ミュージアム (横浜)

[個展] 河口湖ミュージズ館 (山梨)

その他、個展、グループ展多数

<パブリックコレクション> ロシア国立極東美術館

山内若菜HP <http://www.cityfujisawa.ne.jp/~myama/>

「若菜絵ブログ」<http://wakanaeblog.seesaa.net/>

Facebook 「山内若菜」ほぼ毎日更新